

新版のまえがき

本書『お金の減らし方』は、二〇二〇年四月に発行された。執筆したのは二〇一九年の春だから、コロナ禍以前。ウクライナもガザも戦争になるまえのこと。「来年は東京オリンピックだ」といった頃である。当時、僕のHPにこの本を以下のように紹介した。

「お金を増やす方法を書いてほしいと依頼されましたが、お金を増やした経験がないので、しかたなく、減らす方法を書きました。ただ、減らし方も、普通の人よりは知らない方だと思います。大事なことは、いつも書いていますが、『欲しいものを買う。必要なものは買わない』ということです。この本を書いたことで、またお金が増えてしまいました。」

お金が増えてしまったというのは、もちろん本書で得た印税を示している。ただ、これまでに僕が上梓した新書のなかでは、部数が伸びていない本だといえる。やはり、タイトルに問題があったのだろうか。正直に書きすぎたのか。

さて、執筆から五年が経過した。編集者から「新版を出したい」と連絡があり、ゲラを読み直し、今このように「新版のまえがき」を書いている。この五年間で時代が変わったような気もする。日本では、インフレになり、円安が進み、株価も上昇、政権の気持ちは低迷、自然災害も幾つか。だから、本書の内容も、どこか修正しないといけないかな、という気持ちでゲラを読んだのだが、何一つ直すところがなかった。僅かに、表記を変えた程度。僕自身に変化がなかったことが要因だろう。

僕は、最近になって年金をいただけるようになった。執筆の仕事は、五年まえの半分以下まで減らすことに成功した。毎日をほとんど遊んで過ごしている。それ以前から遊び惚けていたのに、まだ遊ぶことがあったのか、と思われるかもしれないが、人間は遊ぶために生きているのだ。いくらでも遊べる。遊ぶなくなったらお終いだ。

最近増えてきているのは、「FIRE」の例として森博嗣を取り上げている書込みである。FIREとは、経済的自立&早期退職の略らしい。しかし、僕は経済的に自立していないし、

早期退職した覚えもない。それどころか、そのいずれの概念も、実在すら疑っている。

特に、経済的自立なんて、現代では不可能な離れ業といえる。迷子の小学生か幼稚園児なら、あるいは可能かもしれないな、と想像することしかできない。その昔の流行語に「脱サラ」というのがあった。あれに近いのかな、という程度の認識である。そういわれてみると、僕はたしかに脱サラだ。僕の親父も脱サラで工務店を起業した。「会社員と結婚したつもりが、客相手をしなければならなくなった」と母は嘆いていた。一方、僕の奥様（あえて敬称）は、「貧乏な公務員と結婚したつもりだったけれど、突然夫が作家になって、欲しいものがなんでも買えるようになった」と喜んでいらっしやる。

稼いだ金に応じた生活を、誰もがしている。そうするしかない。余分に稼いだときはさらに遊べば良いし、金が不足しているなら我慢をして働くしかない。どちらも同じく成り行きであり、必然というか自然である。どちらが偉いということもない。自分の人生計画を持つと、多少は望みに近い方へ近づける、という程度の違いである。

ほとんどの人が、この自然の流れに従って生きていくように観察できる。空腹になったらなにかを食べる。満腹になったら食べるのをやめる。それと同じように、やりたいことがあったら、お金を稼ぐしかない。お金を稼いだら、好きなことをする。それでお金がなくて

なってしまうても、しばらく満足は残るだろう。美味しいものを食べたときと同じだ。

しかし、生き続けるためには、いずれまた食べないといけない。仕事をして金を稼ぎ、生きるために食べる。自分が好きなもの、美味しいものを食べたい人は、ちよつと余計に働く必要があるし、食事に興味がない人や少食の人は、あくせく働かなくても良い。どちらが偉いわけでもない。そういうことを、この本に書いたつもりである。

結局は、自分の好きなことをすれば良い。それができるように頑張れば良い。誰でもそれが可能である。もし、それができない、自分の好きなことがさせてもらえない、という方がいるとしたら、それは過去に、自分に不相応なものを食べてしまったからだ。そのツケが今になってその人の前に立ちはだかっているのだろう。恨むなら、過去の自分を恨み、改心し、ひとまずはそのツケを払って、出直すしかない。

自分の好きなことは借金をしないとできない、とおっしゃる方は、借金をすれば良いだろう。借金は違法ではない。なにも悪くはない。誰かを責めているでもないし、嫌味をいつているでもない。思いどおりにすればよろしい。

年金をもらっていると書いたが、僕の場合、共済年金と国民年金をいただいている。月額で十七万円くらいかな。ありがたい、といたいけれど、支払った分が戻ってきている段階

であり、まだ黒字にはなっていない。そこまで生きていられるか自信がない。

毎月新刊を出していた頃と比較し、作家の仕事は激減させた。もうほとんど「無職」に近い本物の隠居になった。寿命から考えて、残りの時間で、今持っている資産をどこまで減らせるだろうか、という不安を抱えている。

なにしろ、欲しいものはほとんどもう買ってしまったから、この頃、思うようにお金を減らすことができない。買ってしまった膨大な量のおもちゃ、ガラクタ、部品、資材などが倉庫に眠っていて、これを残りの時間で消費することは、まず不可能だ。新たに欲しいものが登場することに望みをかけているけれど、目が肥えてきたから、減多なこと欲しくならぬ傾向にあり、けっして見通しは明るくない。

世界中の模型屋を探し回っていた頃が懐かしい。あの頃は無知だったから、なんでも魅力的に見えた。買えない、見つからない、という状況が楽しかった。今は、ネットですぐに連絡がつき、それどころか、むこうから「面白い出物がありますよ」と連絡が来る。そして、たいていは、「それなら持っています」と断ることになる。

したがって、欲しいものは幾らかあるものの、それらはまだこの世に存在しないものばかりになってしまい、この世に存在するもので、僕が欲しいものは底を尽きつつある。こうし

て、ますますお金の減らし方に苦慮しているのが現状だ。『お金の減らし方』という本の著者なのに、お金の減らし方に行き詰まっている。どうしたらお金を減らせるのか、教えてもらいたいほどだ。

ただ、頭を冷やして考えると、欲しいものが激減しているのは、嘆かわしいことかもしれないが、倉庫に眠っているものは、すべて自分が欲しいものである。何が眠っているのか、覚えきれないし、すっかり忘れてしまうことさえあるから、それらを見つけた時に大喜びできる。老人になって記憶が不自由になることで救われている、といえる。案外、これで楽しめているのだ。だから、さほど自分の境遇を悲観していない。まあ、こんなものだろうか。

必要なものは、今でも買い渋っている。つい先日、奥様が僕のTシャツを（なんの相談もなく）四着もネットで購入した。六万円くらいだったらしい。Tシャツが一枚一万五千円もするのか、と衝撃を受けた。まだ見ていないが、どうやら、かつて僕がよく着ていたブランドのものらしい（当ても買っていたのは奥様だが）。

毎日、僕はそのブランドのTシャツを着ている。それ以外のTシャツは持っていない。五十着くらいあるから、五十日分だ。ここ十年以上、新しいものを買わなかったはずなので、

その五十着だけで着回していたことになる。安いTシャツなら、とつくに劣化していったらう。

その中でも、よれよれになり、ほつれているものがあつた。そうなると、その劣化したTシャツを僕は優先的に選んで着る。庭仕事や工作で汚れる可能性がある日々に適しているからだ。誰かに会ったり出かけたたりすることはないので、状態の良いTシャツは減多に選ばれない。劣化組ばかり使用頻度が増し、ますます劣化に拍車がかかる。こうしてTシャツ格差が生まれ、よれよれのもの、新しそうなものに二極化する。奥様はこの状況を見て、「早く捨てなさい」とおっしゃっていた。まだ着られるから捨てないでいたら、嫌味のためか、新しいものを買ってきた。そういうわけである。

靴下は、まったく同じものを何足も持っている。そうすれば、どこかに穴があいても、もう片方を捨てなくても良く、全体に与える影響が少ない。靴下は年中同じ種類のものを使っている。出かけないから、着るものは多種類はいらない。靴は、スニーカーとスノーシューズの二種類だけ。ファッショ的な機能はいらない。

外食はしないし、旅行もいかない。電車やバスに乗らない。店に入らない。財布を持って出かける機会がない。買い物はすべてネットだけれど、その九割は、電子部品か金属材料で

ある。

自動車は必要なものに属するけれど、五年まえにクラシックカーを買ってしまい、犬と一緒にドライブしている。僕以外には運転できない。雨や雪の日は乗らない。半年に一度、オイルを交換し、点検を受けている。奥様が乗っている車はツーシータだから、大きいものが運べない。家にある車はどれも小型で、家族と犬を全員乗せて出かけることができない。ラジコン飛行機を飛ばしにいく日にはレンタカーを借りている。森家はかように、「必要なものは買わず、好きなものを買う」とのポリシーに徹しているので、見かけ上、不便なことを楽しんでるようだ。

今回の新版では、古市憲寿氏から解説をいただいた。大変面白く読ませていただき、それでつられて、今これを書いている。彼は、何が楽しいのかわからないけれど、いろいろなことにお金を使っている様子を書かれていますが、僕も彼の年齢のときはそうだったかもしれない。ただ、おぼろげに、「なにか楽しそうだな」と匂うものに手を出していた。そして、そんな経験を積み重ねるうちに、どんどん鼻が利くようになった。だから、全然無駄というわけでもなかっただろう。

僕の倉庫に溜まっているガラクタも、匂ったから手に入れたものたちだ。自分のお金を

使って、楽しめそうなものを手に入れておくと、いずれは、そんなガラクタか思い出に囲まれた日々を送ることができる。

楽しそうなものの集合に、本当に楽しいものがある確率が高い、と数学的に、否多分に経験的にいえそうだが。

二〇二四年三月 森博嗣